

土が衣食住に介在

農耕は穏やかな風化期に

人類はその食料の95%以上を土に依存している。食料に限らず衣食住のほとんど全てが土を経て創られたものである。人間の生き方の様子を「文化」とするならば、人が住んでいるその土地の土の性質が文化に反映されるのは当然のことだろうと思う。

と風化作用を経て土には農耕や牧畜が人間の生活になっていく。藤原彰夫先生は「土と日本古代文化」(博友社、1991)のなかで、過酷な風化作用として寒冷な針葉樹林地帯における「ポドソル土」(ポドソル土)と「ラトソル土」(砂漠土)へと変化していくが、この3種の土の相互の間と風化の中間的な時期に相当する土壌のみが人間をはじめ生物の利用可能な土壌であると述べている。すなわち、土が生まれてから死にいたるまでの適当なある時期しか人間は農耕、牧畜用として土を利用しえない。

「ポドソル土」と「ラトソル土」はそれぞれ冷帯と熱帯の森林植生を支持している。どちらの場合も樹木は土壌表層に堆積した有機物層との間で養分を循環させており、それ以下の土壌層位は酸性と養分不足により作物生産には適していない。熱帯の森林では再生を妨げ

土壌の最終系は3種

岩石は地表に現れたあ

化過程が存在し、そこで

これらの中間に穏やかな風

帯の森林では再生を妨げ

ない範囲の焼畑農業のみが可能である。砂漠土壌は水分不足と養分不足があいまって植生を支える



ポドソル土 (左)、鉄アルミナ質土壌 (中)、砂漠土壌 (右)

水田が日本の文化

藤原氏は人間の文化が

それぞれの地域の土壌に大きく影響を受けているとし、ポドソル土文化、赤黄色土文化、黄土文化、

草原土文化など土壌の種類と対応した各種の文化の存在を例証したが、日本の文化に大きく影響を



山麓の上部まで400年近くも続く岐阜県恵那市坂折の棚田 (2005年9月 著者撮影)

遊牧と交易を生業とする「ネットワークする力の文明」であり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などの一神教を生み出した。

「石の文明」は、岩盤上の薄い土壌の上で牧畜を生業として発達し、衰退とともに次々に根拠地を移していったヨーロッパの「外へ進出する文明」である。

現在、ヨーロッパと北アメリカでは徹底した土壌保全事業と手厚い農業農民保護政策によって農耕地の劣化をくいとめている。

共生理念を生む泥

「泥の文明」は、日本、東南アジア、インド東部を含む湿潤温暖なアジア・グリーンベルト圏に発達した定住の農耕文明であり、生命力にあふれた「泥」が「内に蓄積する力」を秘め、共生の理念に基づく社会を生み出した。

「泥の文明」においては主要な土地利用形態が水田農業であり、水田は土壌肥沃度の低下が非常に少ないので、ほぼ永続的な農業が行われている。

文明、文化の荒廃

このように、人間の文明と文化の基盤は土にあるが、それらは永遠不滅のものではないので、土が荒廃すればその上に立つ文明と文化も荒廃することになる。

及ぼしたのは褐色森林土・火山灰土文化（焼畑文化）と水田土文化である。

他方、松本健一氏によれば「文化」とは個々の民族の生きるかたちであり、「文明」は民族の違いを乗り越え、共通した風土と歴史のうえに普遍的に築きあげられる社会や生活のしくみのことをいう。

松本氏は、人間が生活している土地の成り立ちが文明の様式に著しい影響を及ぼしたとして砂の文明、石の文明、泥の文明が区別されると述べている（「砂の文明・石の文明・泥の文明」PHP新書2003）。

「砂の文明」は、砂漠地帯に発達した非定住で